平安京右京五条三坊三町跡発掘調査現地説明会資料

2005年４月16日

所 在 地　京都市右京区西院矢掛町16・17番地
調査期間　2005年３月15日～４月28日（予定）
調査面積　約500㎡
調査主体　(財) 京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

当地は平安京右京五条三坊三町にあたり、東側には道祖（さい）大路（現春日通）が南北に通っていました。周辺ではこれまでに平安時代の建物などが多く見つかっており、平安時代の遺構の保存状況が良いところです。また当地は弥生時代から古墳時代にかけての集落が営まれた西院遺跡にも含まれています。

調査の概要

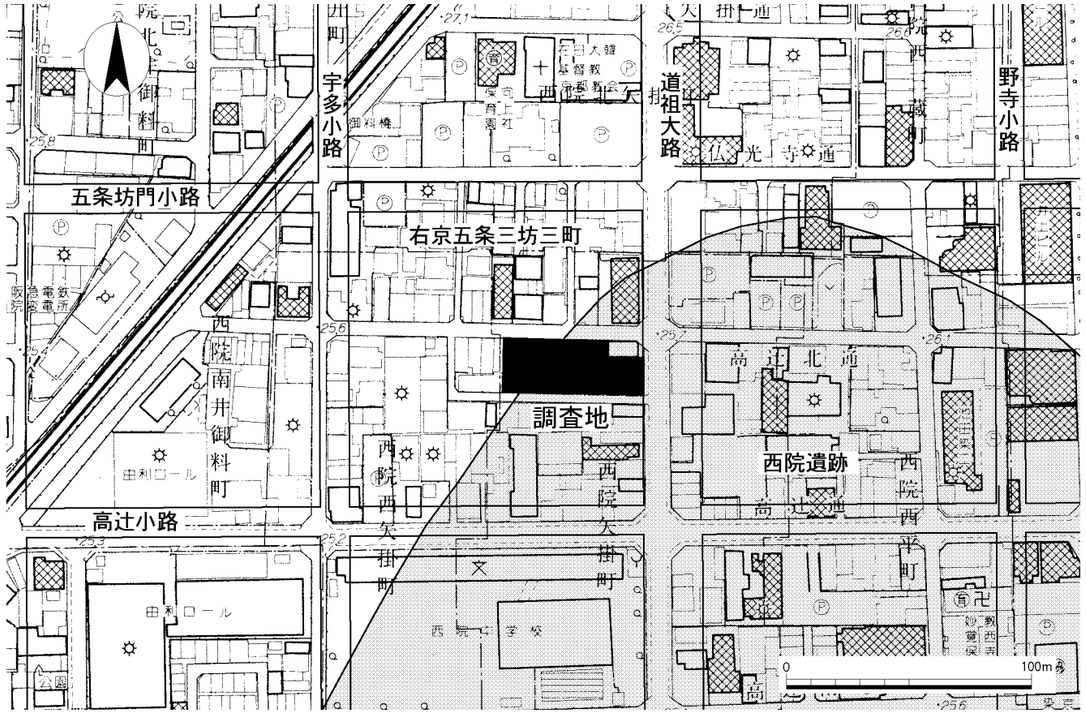
調査の結果、平安時代前期（９世紀前半）から中期（10世紀初頭）の建物や溝を発見しました。建物は現在までに７棟を確認しています。この内、調査区の中央部分では３棟が重複しているので、何回かの建替えがあったものと考えられます。これらの柱穴のいくつかには炭や焼土が入ったものがあり、火災にあったのかも知れません。このほかに土器や石を詰め込んだ、地鎮や鎮壇のためと考えられる埋納遺構も２箇所で確認しています。

調査区の中央部では「H」字形に交わる溝を見つけました。ここからは大量の土器や瓦類が出土しています。土器類には土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中国からの輸入磁器（白磁、青磁）など多彩なものがあります。中でも中国からの輸入磁器が多いのが特徴です。また、須恵器の円形の硯（円面硯）など、特殊な器形も含まれています。

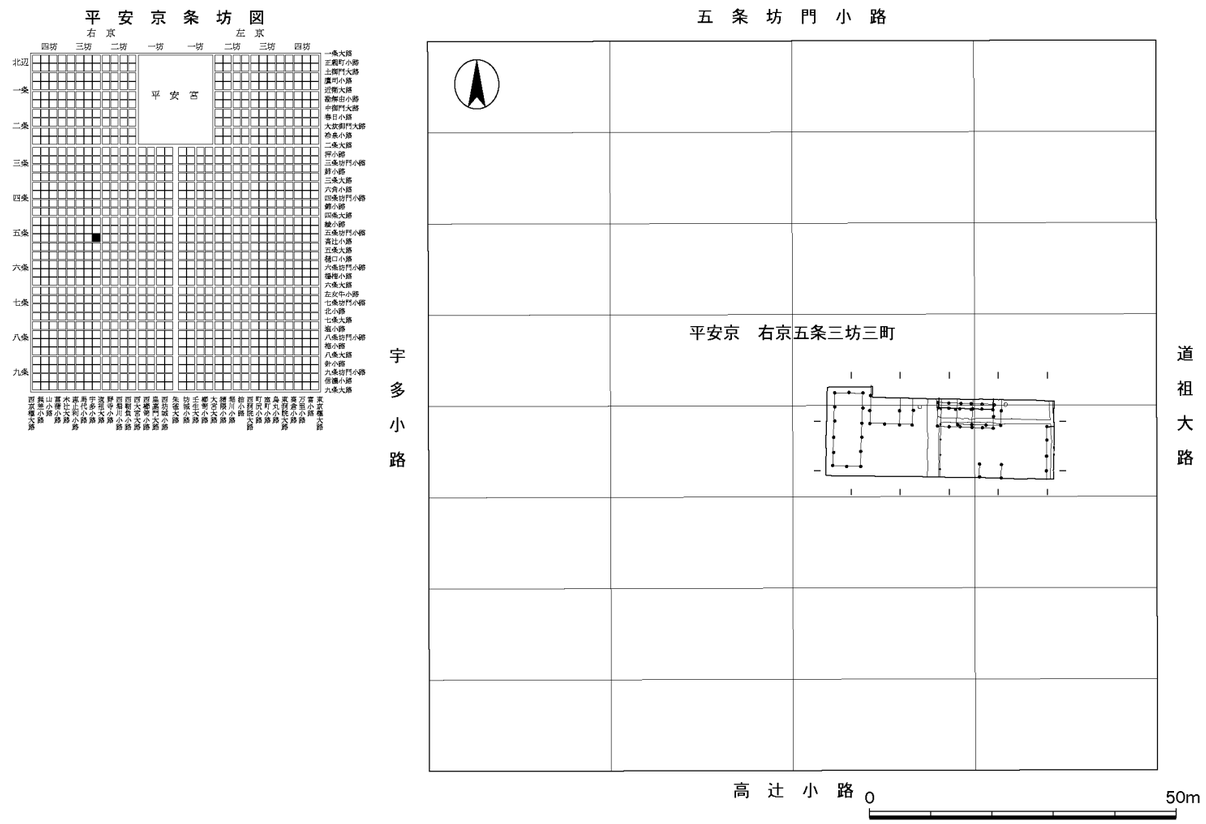
まとめ

今回の調査では平安時代前期から中期の遺構群を明瞭な形で発見することができたことが最大の成果です。以下、調査でわかったことをまとめてみます。

- 遺構は建物の配置や規模、出土遺物の豊富さからみて貴族の邸宅に関連するものであると思われます。
- 建物や溝には重複した部分があり、遺構に数時期の変遷があるものと考えられます。
- 平安時代中期より後の遺構はほとんどみられないので、中期以降は人が住まなくなったものと考えられます。このことから文献などにみられる平安京の右京域が比較的早くから衰退したことを裏付けることができました。
- 西院遺跡に関する遺構は発見できませんでしたが、サヌカイトやチャート製の石器が見つかりました。



調査地位置図（１：2,500）



調査地と四行八門制（１：1,000）

写真１　調査地全景（東から）

写真２　溝１（北西から）

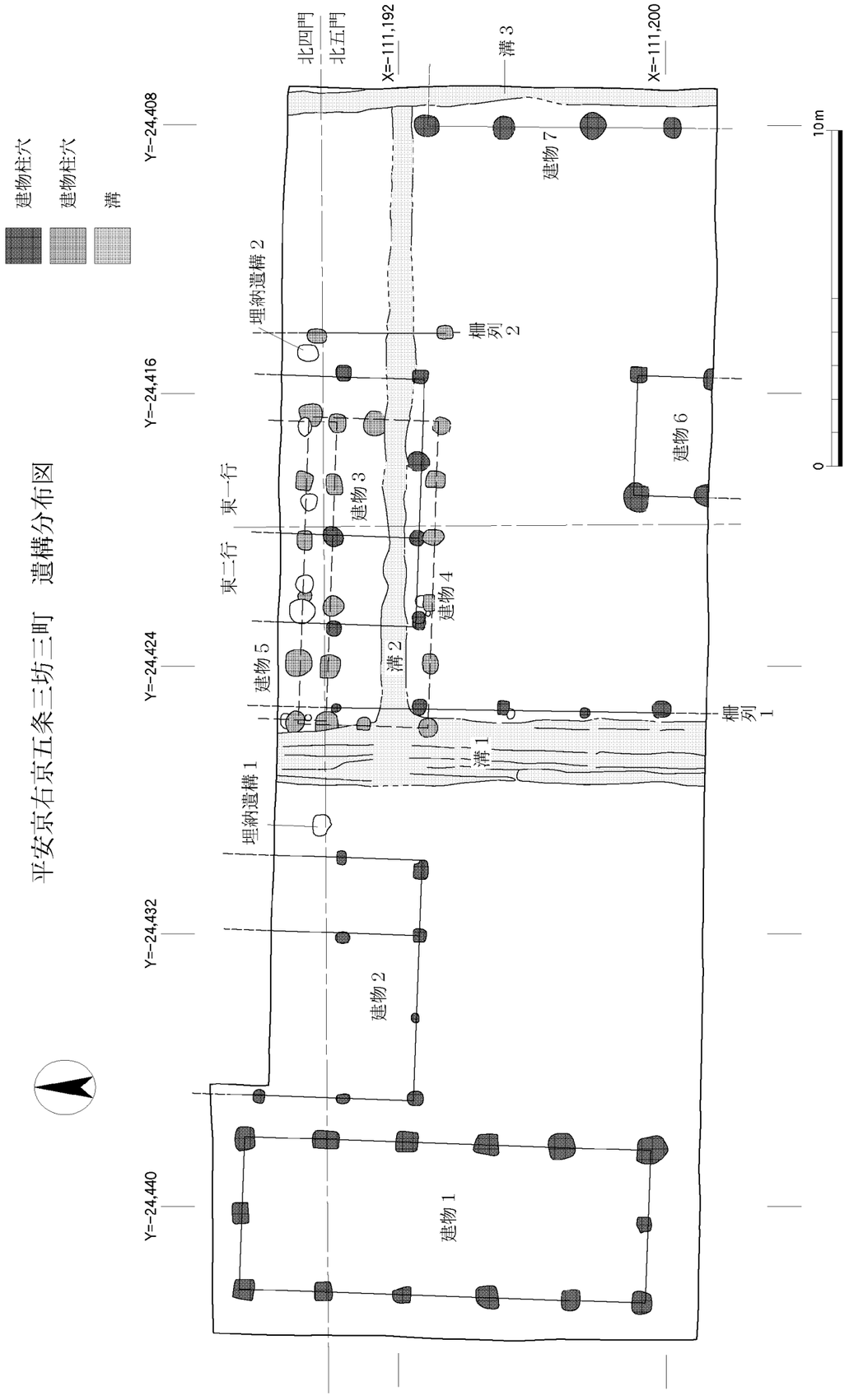



写真３　溝１遺物出土状況